

時代を駆ける：岡部健／4 自宅緩和ケアに共感

◇TAKESHI OKABE

《患者と接するうち、一人一人に積み重ねてきた暮らしがある、治療目的だけでいいのかと考えるようになった。1990年、開業する宮城県立がんセンターの呼吸器科医長に就任するため、仙台市に戻った》

麻酔科部長は東北大学の先輩の山室誠さんで、ホスピス施設をつくる市民運動に関わっていました。在宅緩和ケアに取り組みたいという話に共感し、「一緒にやりましょう」と。看護師も加え、患者宅を回るボランティアチームをつくりました。

《在宅の患者を、初めて訪問した。28歳の肺がん患者で、幼児2人の母親だった》

私が担当医でしたが難しい症例で、手術ではがんを取りきれませんでした。通院治療を続けましたが、脳への転移が分かり、夫に伝えました。

しばらくして彼女から「夫の様子がおかしい。何も話してくれず、夫婦にわだかまりができた。本当のことを話してほしい」と懇願されました。「がんセンターに来ているのだから、病状が良くないことは分かっている」とも言われました。

2人を呼び、病状や治療の選択肢を説明しました。放射線治療で意識障害の進行を遅らせる可能性があること、ただし完治の見込みはないこと。女性は「じゃ、帰ります」と即答でした。入院より、子どもと過ごせる自宅を望んだんです。



インタビューに答える医師の岡部健さん

《その後女性宅を訪ねると、病院で見せない穏やかな表情をしていた。しゅうとめが女性と子どもの面倒をみていた》

女性は病気が進み、まもなく失明しました。それでも、「自宅なら音を聞けば子どもたちが何をしているか、手に取るように分かる」と子どもを叱ったりしていました。「入院すれば周囲は知らない人ばかりで怖い」とも語っていました。

病院は医療機器や専門家がそろっていますが、患者には日常生活や人間関係が断たれてしまう。家なら、亡くなる直前まで普段の暮らしを保てるのです。私は市に掛け合い、特例で彼女の家ヘルパーを入れてもらいました。環境さえ整えば、患者を在宅で診られると分かった。私は担当の入院患者30人に、在宅療養を勧めてみました。

=====

聞き手・下桐実雅子 写真・丸山博／火～土曜日掲載です

=====

■人物略歴

◇おかべ・たけし

栃木県小山市生まれ。医療法人爽秋会理事長。がん患者の在宅緩和ケアのパイオニア。日本ホスピス緩和ケア協会理事。61歳

毎日新聞 2011年5月27日 東京朝刊